

事業名称	コロナ禍を契機とした新たな利用形態の開発に向けて 都市型地域ミュージアムモデル形成事業		
実行委員会	ミュージアム活性化実行委員会委員長		
中核館	大阪歴史博物館		
	住所	〒540-0008 大阪市中央区大手前 4-1-32 大阪歴史博物館内	
	TEL	06-6940-0569	FAX 06-6940-4471
	ホームページ	<a href="http://www.mus-his.city.osaka.jp/">http://www.mus-his.city.osaka.jp/</a>	
構成団体	大阪市立美術館、大阪市立東洋陶磁美術館、大阪市立自然史博物館、大阪市立科学館、大阪中之島美術館準備室、一般財団法人大阪市文化財協会、公益財団法人大阪国際交流センター、公益財団法人大阪観光局、地方独立行政法人大阪市博物館機構		
事業開始時点の課題分析	<p>大阪市には、長い歴史を持つ博物館・美術館等（以下、「ミュージアム」という）が多数ある。これらは、従来から相互に連携し、また地域の個人・団体とも共働してさまざまな成果を上げてきた。2019年4月、これらのうちの主要館が地方独立行政法人大阪市博物館機構（以下、「機構」という）のもとで一体的に運営され、より強固な結びつきを持って事業が実施され始めた。機構には歴史・美術・自然史・科学など個性を持った6館（開設準備中の1館を含む）が含まれ、学芸員は80名以上に上る。しかし、令和2年2月末以降の新型コロナウイルス感染症の蔓延（以下「コロナ禍」）、その後の2度にわたる緊急事態宣言を受け、ミュージアムの活動は様々な制約を受けている。それは大型海外展や大規模イベントの中止から、種々の普及行事、ハンズオン視覚障害者対応、資料収集の呼びかけなど様々な側面に及んでいる。</p> <p>しかし、困難は新たなモデル開発のための契機でもある。博物館の連携、Web活用、新技術などを活用して、コロナ禍で難しくなっているからこそその「触る展示」の再検討など乗り越えなければならない課題に挑戦する必要がある。巨大な人口を抱え、多くの児童・生徒、高齢者、障がい者、そして外国語を母語とする住民を抱える「大都市に存在する地域ミュージアム」として、教育、福祉などの分野・機関を超えて共働して模索し、ロールモデルを構築する必要がある。</p> <p>これまでの事業の中でこうした様々なニーズを持った人々との関係を構築できた大阪の博物館だからこそ、先進的な「都市型地域ミュージアム」（大きな人口を抱え、地域に向き合う包摂的な機能を持ったミュージアム）のモデル構築を追求できる。このことが、ミュージアムを核として地域全体を活性化させることに直結する。更に、こうした地域内でのコンテンツ強化は都市としての発信力強化にもつながるものであり、文化集客に繋がる活動でもある。2025年の大阪・関西万博を睨みつつ、機構傘下のミュージアムを核として、大阪市内で活動するミュージアムや大学・非営利活動法人などの関係機関との連携を深め、地域に密着した博物館活動の具体化を図っていく。</p>		
事業目的	<p>本事業の目的は、先進的な「都市型地域ミュージアム」のモデル構築に向けて、コロナ禍を契機としてミュージアムの活動刷新を図り、地域とともに活性化することであり、いくつかの方策に分けて取り組んでいく。</p> <p>第1は、ミュージアムと地域が持つ課題を改めて客観的に把握し、現在の状況、新しい生活様式下でも実現可能で将来に資する事業改善に活かす方策を検討することである。同様の課題を抱える機関とも連帯し、情報・知識・知恵の共有・結集を図る。</p> <p>第2は、コロナ禍に対応し、ポストコロナを見据えた事業モデルの開発を推進することである。大阪市というコンパクトなエリアに各館が集積している点や、多くの学芸員を擁している強みを最大限活かし、関係機関と連携して、オンライン等による情報発信、ユニークベニューの開発、優れたコレクションの国際発信による将来の国際集客体制の整備など多様な実践によって、推進する。</p> <p>第3は、コロナ禍でとりわけ大きな課題となった「触る展示」や体験型展示、ワークショップ、対面型解説などについて、実践的な改善・検証を通して、誰もが利用しやすいミュージアム、バリアフリー化を推進する。</p>		

<p>事業概要</p>	<p>①新たな生活様式とミュージアム      新しい生活様式下でも実現可能で、将来に資する事業改善に活かす方策を検討、企画立案を行う。さらに課題を幅広く共有し、改善につなげるため、他館・関係機関と連携して、シンポジウムを開催する。</p> <p>②コロナ禍に対応し、ポストコロナを見据えた事業モデルの開発      地域に身近にあるミュージアムの存在を伝えるガイドブックの作成、オンライン等を活用した多様な市民参加イベントの開発、新しいコミュニティの創出に向けたユニークベニユーの開発、日本を代表するコレクションの国際活用の推進、市民への資料収集の呼びかけによる歴史・文化の豊かな大阪という地域の「再発見」、教育者への支援など、多角的な活動に関係機関と協働して取り組む。</p> <p>③ハンズオン・バリアフリー化によるコロナ対応      障がいのある方を含め、誰もが障壁なく利用できる展示・教育普及事業・情報発信などを拡充する。視覚障がい者の協力などにより、現状の施設にある課題を調査するとともに、バリアフリー化の優れた事例の収集、情報交換を行い、施設のユニバーサルデザイン化を推進する。</p> <p>④実行委員会構成団体について、今年度中に地方独立行政法人以外の文化施設等の参画の検討を行う。</p>
<p>実施項目 ・ 実施体系</p>	<p>1. 新たな生活様式とミュージアム      (1) ミュージアムの新たな利用形態の検討          ① 「コロナ禍とミュージアム」検討会議          ② 「コロナ禍、ミュージアムは地域に何ができるか？」(仮題)の開発          ③ 「地域の価値を広域へ・異分野へ ミュージアム発信とDX」(仮題)の開発</p> <p>2. コロナ禍に対応し、ポストコロナを見据えた事業モデルの開発      (1) ミュージアム情報の発信充実          ① 「大阪ミュージアムガイド」の作成・配送・ウェブ配信          ② 地域の自然に関わる市民団体の文化祭イベントの開発      (2) オンライン等を活用した多様な市民参加イベントの開発          ① 学芸員等による連続講座の開発          ② 地域の自然に関わる市民団体の文化祭イベントの開発      (3) ユニークベニユーの開発          ① ユニークベニユーによる科学館の魅力の発信      (4) 文化・科学を担う人材の育成          ① ミュージアム活用をすすめるための教員研修の開発          ② 地域と大阪を繋ぐプラネタリウムを使ったライブ学習講座の開発      (5) ステイホーム下における資料の収集と活用          ① 地域に眠る映像資源のデジタル発信      (6) コロナ禍の中でコレクションの国際活用          ① 館蔵資料の高精細デジタルコンテンツの多言語国際発信</p> <p>3. ハンズオン・バリアフリー化によるコロナ対応      (1) ミュージアムのバリアフリー化          ① 新しい生活様式に対応した「触る展示」化の推進          ② 博物館施設における視覚障がい者の展示鑑賞支援の推進</p>
<p>実施後の 成果・効果等</p>	<p>本事業の多角的な活動、取り組みにより、以下の成果が得られた。      コロナ禍に対応し、ポストコロナを見据えた事業モデルについて、      ・「大阪ミュージアムガイド」の作成を通じて、大阪市内にある様々な博物館と繋がりをつくる      ことができた。ガイドブック電子データを大阪市博物館機構のホームページに掲載するとともに、      ガイドブック掲載館や市内の小・中・高等学校、公共施設等にガイドブックを配架し、来館者や市民の方に博物館情報を発信することができた。来館者、市民の方々に、市内にある多彩な博物館を知っていただく機会となった。</p>

・地域の自然に関わる市民団体の文化祭イベントについて、感染症拡大防止の観点から、オンラインシンポジウムとし、YouTube ライブ配信で開催した。リモートでの人間関係の希薄化への懸念と、オンラインを上手く利用した層の取り込みの可能性が共有された。

・学芸員等による連続講座について、16回のオンラインライブ配信を行った結果、平均の視聴数は72.5人であった。また、10代から70代までの幅広い層に視聴いただき、視聴者アンケートでは、「訪れることの無かった館で、どのような活動をしているのか知る一助となった。」等の意見があった。講座内容の評価については、9割以上の良い評価が受けることができた。

・ミュージアム活用をすすめるための教員研修について、大阪歴史博物館においてYouTube 動画配信により、博物館が提供するウェブコンテンツの使い方の紹介や館内の展示案内の紹介を行った。参加者からは、学芸員による専門的な話が聴ける機会として楽しみにしているとの意見があった。

・地域と大阪を繋ぐプラネタリウムを使ったライブ学習講座の開発について、遠隔地域の星空の映像をライブ中継でプラネタリウムに投影し、それを材料に、現地専門家のライブ案内と共同で解説する学習講座を試みた。参加者からは、「思った以上にリアルだった。」「遠くの星空を見られるは驚き」等の感想が寄せられた。

・地域に眠る映像資源のデジタル発信について、地域に眠る映像資源を発掘する事業を実施し、一般からは4件のフィルム提供があり、協力機関の収蔵映像とともに学芸員による歴史解説付きの上映会を実施した。参加者からは「地元でも上映してほしい」「また参加したい」等の感想が寄せられた。

・館蔵資料の高精細デジタルコンテンツの多言語国際発信について、大阪市立東洋陶磁美術館の館蔵作品の新規撮影とオープンデータ化、オープンデータサイトの高精細高解像度画像データや多言語テキスト等のコンテンツを拡大し、併せて利便性の向上を図った。これにより、作品画像データの教育研究利用や商業利用、新たな文化創造活動等多方面の促進が期待でき、当館所蔵品の魅力を国際的に発信し、当館の活動を広く社会に還元できるものである。

ハンズオン・バリアフリー化によるコロナ対応

・新しい生活様式に対応した「触る展示」化の推進について、大阪市立科学館において、触賞が可能な展示物の選択と解説文の作成を行った。触賞可能な展示物を掲載する「見学ガイド」を点字版、大きな活字版、音声版の3方式で発行するとともに、館内案内用の触知図、展示ブロックを設置した。これにより、盲導犬を伴った来場者が1件あり、触賞可能な展示物や見学ガイドの利用法を案内することができた。

・博物館施設における視覚障がい者の展示鑑賞支援の推進について、大阪市立自然史博物館における展示鑑賞の障壁を弱視者によるコンサルティングにより明らかにした。その際、墨字パンフレットの問題点が指摘され、改訂を行った。また、視覚障がい者接遇研修を2回実施し、シンポジウム「開かれた博物館へ：視覚障害者の方とともに楽しむ」をオンラインで開催した。視聴者からは、「講師の柔軟な発想に驚かされた、人間工学の視点を博物館の展示や施設にも生かしたい」等の感想があった。

本年度に実施した事業については、オンラインで実施した事業が多く、参加者からは、「実際に博物館に訪れなくても、館の活動を知ることができた。」との意見をいただくなど、コロナ禍に見舞われたこの2年間余り、博物館・美術館では、インターネット配信やwebコンテンツなどでの配信の強化に取り組んでおり、これらの取組を振り返り、博物館へ行くことが出来ない方への情報発信の方法、今後の博物館のあり方について検討を進めることができた。また、大阪市というコンパクトなエリアに各館集積し、多くの学芸員を擁している強みを生かし、関係機関と連携して、オンラインによる情報発信を行うことができ、「コロナ禍とミュージアム」の検討では、シンポジウム「リアルとバーチャル、博物館は未来をどう考える」を開催し、情報・知識・知恵の共有を図ることができた。

引き続き、博物館の連携、ウェブ活用、新技術等を活用し、多くの方が利用しやすい博物館の活用方法の検討を推進していくこととする。

## 【事業実績】

### 1. 新たな生活様式とミュージアム

#### (1) ミュージアムの新たな利用形態の検討

##### ① 「コロナ禍とミュージアム」の検討

「博物館は実物と出会う場所」と言われ、実物だけが持つ迫力があり、実物資料がなければ知り得ない情報、初めて解明できる謎は科学、歴史、美術それぞれにあるが、博物館でもインターネット配信やwebコンテンツなどでの配信の強化に取り組んでおり、その中で、バーチャルな手段にも面白い部分があると考えシンポジウム「リアルとバーチャル、博物館は未来をどう考える」を実施し、未来の博物館のあり方までを俯瞰して考える討議を行った。視聴者から「博物館に行かず、好きな場所で展示品を見られるというのは「利用者」にとってはかなり良い取り組みであると思う。」との意見があった。

配信アーカイブ：<https://www.youtube.com/watch?v=6i7DANodVp0>



シンポジウムでの討議

### 2. コロナ禍に対応し、ポストコロナを見据えた事業モデルの開発

#### (1) ミュージアム情報の発信充実

##### ① 「大阪ミュージアムガイド」の作成・配送・ウェブ配信

大阪市内に集積する美術館・博物館等48施設を網羅したハンディなガイドブック「大阪市ミュージアムガイド」を作成し、電子データを大阪市博物館機構HPに掲載(<https://ocm.osaka/news/10460/>)するとともに、関西の美術館・博物館や大阪市内の小・中・高等学校、区役所・図書館等の公共施設やホテルなどの観光施設等にガイドブックを配架した。来館者、市民の方からは、いままで気づかなかった博物館等を知る機会となった等の声があった。また、小中学生や高齢者からも実物の冊子が欲しいとの声もあり幅広い層から関心があった。



大阪市ミュージアムガイド

##### ② 地域の自然に関わる市民団体の文化祭イベントの開催

感染症拡大防止の観点から、代替のオンラインシンポジウム「コロナ禍後の活動のリポートを目指して」をYouTubeライブ配信で開催した。ウィズコロナの中で様々な活動を展開する6つの組織・グループが事例紹介し、今後の活動再開に向けた課題を議論した。リモートでの人間関係の希薄化への懸念と、オンラインを上手く利用した新たな層の取り込みの可能性等が共有された。ライブ配信の同時接続数は80、3月17日時点での再生回数は992回。オンラインシンポジウムの告知及び報告ページ：大阪自然史フェスティバル代替シンポジウム「コロナ禍後の活動のリポートを目指して」<http://www.mus-nh.city.osaka.jp/fes-sympo2021/index.html>

ライブ配信アーカイブ：<https://www.youtube.com/watch?v=9L5poLAp7DA>



シンポジウム告知ページ



シンポジウムでの討議

#### (2) オンライン等を活用した多様な市民参加イベントの開発

##### ① 学芸員等による連続講座の開催

1月～2月の土日、当実行委員会構成団体各館の学芸員16名が、現在開催されている企画展や特別展の展示の解説や自らの専門分野、日ごろの研究成果などについて、オンラインライブ配信で実施した。視聴者は平均72.5人で、10代から70代まで幅広い年代層が視聴した。また、2月19日・20日の4講座は、2月2日に開館したばかりの大阪中之島美術館のワークショップルームから公開録画風のライブ配信を行った。全16講座のうち、公開可能な12講座は以下の講座動画サイトにて公開中である。視聴者アンケートでは、「とても良かった」「まあまあ良かった」が96%と良い評価を得ることができた。

その他コメント：「講師が楽しそうに話されているのが好感度高いです。」「遠いので、なかなか訪れることのない館であるが、どういう活動をされているのかを知る一助になった。」など。

講座動画サイト：<https://www.youtube.com/channel/UC7ow2vqv9N4Om2ABuieM4kA>



Talk&think 公開録画風のライブ配信

#### (3) ユニークメニューの開発 (補助対象外事業となったため未実施)

#### (4) 文化・科学を担う人材の育成

##### ① ミュージアム活用をすすめるための教員研修の開催

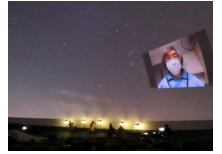
大阪歴史博物館が提供するウェブコンテンツの使い方の紹介及び館内の展示案内などを紹介する動画をYouTube配信で行った。参加者からは、学芸員による専門的な話が聴ける機会として楽しみしているとの声があった。



学校現場で活用可能な博物館のコンテンツの資料の紹介

## ② 地域と大阪を繋ぐプラネタリウムを使ったライブ学習講座の開発

遠隔地域の星空の映像を、ライブ中継でプラネタリウムに投影し、それを材料に、現地専門家のライブ案内と共同で解説する学習講座を試みた。中継先は、福島県田村市と、岡山県井原市の公開天文台で、一般的なネットと機器で、臨場感ある星空をプラネタリウムで中継することができた。事業はNHKも共催し「星空ライブビューイング」と冠し、大阪音大の学生による生演奏やタレントによる進行で楽しい講座として成立させた。参加者からは、「思った以上にリアルだった。」「遠くの星夜が見られるのは驚き」などの感想が寄せられた。



星空ライブビューイング風景

## (5) ステイホーム下における資料の収集と活用

### ① 地域に眠る映像資源のデジタル発信

地域に眠る映像資源（8ミリ、9.5ミリ、16ミリフィルム等）を発掘すべく「大阪フィルムアーカイブ計画」を実施した。一般からは4件（36巻）のフィルム提供があり、協力機関の収蔵映像とともに8日間・7プログラムに及ぶ上映会を開催した（参加者計210名）。学芸員による歴史解説付き上映はいずれも満席となり、参加者からは「地元でも上映してほしい」「また参加したい」などの感想が多く寄せられた。このほか、デジタル化した地域映像をウィキメディアコモンズで公開することとする。

上映会 PR 動画 URL: <https://youtu.be/i-82jxtN7I>



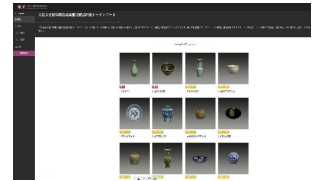
上映会チラシ

## (6) コロナ禍の中でコレクションの国際活用

### ① 館蔵資料の高精細デジタルコンテンツの多言語国際発信

大阪市立東洋陶磁美術館の館蔵作品の新規撮影とオープンデータ化、サイトの改修などにより、オープンデータサイトの高精細高解像度画像データや多言語テキストなどのコンテンツを拡充し、併せて利便性の向上を図った。これにより、作品画像データの教育研究利用や商業利用、新たな文化創造活動など多方面での利活用の促進が期待でき、当館所蔵品の魅力を国際的に発信し、当館の活動を広く社会に還元できるものである。

収蔵品画像オープンデータ URL: <https://websites.imapps.ne.jp/mocoor/>



収蔵品画像オープンデータ（トップ）

## 3. ハンズオン・バリアフリー化によるコロナ対応

### (1) ミュージアムのバリアフリー化

#### ① 新しい生活様式に対応した「触る展示」化の推進

大阪市立科学館において、触賞が可能な展示物の選択と解説文の作成を行った。触賞可能な展示物を掲載する「見学ガイド」を点字版、大きな活字版、音声版の3方式で発行するとともに、館内案内用の触知図、展示ブロックを設置した。このことにより、盲導犬を伴った来場者が1件あり、触賞可能な展示物や見学ガイドの利用法を案内することができた。大きな活字版: <https://www.sci-museum.jp/wp-content/uploads/2022/03/guide-large-point.pdf>

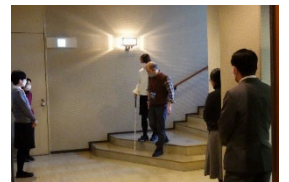
テキスト版: <https://www.sci-museum.jp/wp-content/uploads/2022/03/osaka-science-museum-guide-text.txt>



触知図、点字ブロックの設置

#### ② 博物館施設における視覚障がい者の展示鑑賞支援の推進

大阪市立自然史博物館における展示鑑賞の障壁を弱視者によるコンサルティングにより明らかにし、展示や施設の問題点や改善点の提案を受けた。このコンサルティングにより、大きな文字の「展示見学ガイド」冊子に拡大器で使用しづらい点があることが明らかにされたため、提案を受けて改訂を行った。視覚障がい者接遇研修を、1月13日、2月10日に大阪市立東洋陶磁美術館、大阪市立自然史博物館の2会場で行い、大阪市博物館機構の各館、事務局職員、受付や警備などの契約業者のスタッフ34名が参加した。2月6日に、視覚障がい者展示見学支援シンポジウム「開かれた博物館へ: 視覚障害者の方とともに楽しむ」をオンラインで開催した。2月20日までの見逃し配信を行い、当日の96人を含め、609人が視聴した。視聴者からは、「講師の柔軟な発想に驚かされた」、「やれることから着手しようと思った」、「人間工学の視点を博物館の展示や施設にも活かしたい」などの感想があった。



視覚障がい者接遇研修の風景